17および18世紀イタリアにおける集中形式教会堂

ロムルス神殿ファサードの系譜

CHURCHES OF CIRCULAR PLAN IN ITALY DURING 17TH-18TH CENTURIES

Genealogy of the temple of Romulus

小林 衛*

Mamoru KOBAYASHI

This paper deals with churches of circular plan in Italy during 17th-18th Centuries, and, in particular, takes up several examples deriving from the Temple of Romulus, which was regarded as a model of church in 17th Century. Furthermore the investigation gives attention to the influence of Giovanni Battista Montano, and makes clear that Filippo Juvarra's work in the early 18th Century belongs to the same type.

The purpose is to show the relationship between circular plan and curved façade in clerical architecture by clarifying mechanism of architectural composition. In short, circular plan together with curved façade is not only a model of the building itself, but also a motif in composition of large scale.

Keywords: 17-18th Century, Italy, circular plan church, Temple of Romulus, Giovanni Battista Montano, Filippo Juvarra

17-18世紀、イタリア、集中形式教会堂、ロムルス神殿、ジョヴァンニ・バッティスタ・モンターノ、フィリッポ・ユヴァッラ

1 はじめに

本稿では、17および18世紀におけるイタリアの集中形式教会堂を取り扱う。殊に、ローマのロムルス神殿 *Tempio di Romolo* (図1) をモデルとする系譜に着目し、17世紀初頭に活躍したジョヴァンニ・バッティスタ・モンターノ Giovanni Battista Montano (1534-1621) の創作から、18世紀前期のフィリッポ・ユヴァッラ Filippo Juvarra (1678-1736) の作品までを系統づける。そうして17から18世紀の集中形式と湾曲ファサードの関係を明らかにし、空間モデルの複合的統合について考察する。

集中形式は西洋建築史上、最も重要なキリスト教の教会堂類型であり¹⁾、16世紀において古典主義の建築家が好んだ形式であった。例えばドナート・ブラマンテ Donato Bramante (1444-1514) やミケランジェロ・ブオナッローティ Michelangelo Buonarroti (1475-1564) が設計に関わったヴァチカンのサン・ピエトロ教会堂 *S. Pietro in Vaticano* 新築計画における集中形式平面の展開については、現在も研究活動が旺盛に行われている²⁾。しかしながら、17世紀以降を対象とする研究では、これまで集中形式を取り上げることが少なかった。また一方で、教会堂ファサードにおいては、17世紀に至り教会堂本体から独立して別個に計画がなされる傾向を強

めている。教会堂内部と関係のない曲面や曲線が見られ、ファサードの独立傾向は17世紀の特徴的な建築現象として注目される³⁾。

集中形式と曲面ファサードは、ともすれば異なる時代の象徴として捉えられてきた。そのため同時に取り上げられることがなかったのだが、フランチェスコ・パオロ・フィオーレ Francesco Paolo Fiore が、ロムルス神殿をモデルとして古代から17世紀にかけての集中形式と曲面ファサードをもつ建築の系譜を提示した⁴⁾。本稿では、フィオーレの示した17世紀を中心とする事例に、新たに18世紀の事例を加えてロムルス神殿モデルの再検証を行い、17世紀以降の建築設計の展開について考察する。

2 モンターノとロムルス神殿

ミラノ出身の指物師兼建築家のジョヴァンニ・バッティスタ・モンターノは、ローマ市内および郊外の古代遺跡図を収録した『古代の神殿 *Scielta dli varii tempietti antichi ...*』⁵⁾によって知られ、17世紀の建築に変革の契機を与えた⁶⁾。『古代の神殿』では、古代遺跡を集中形式の事例を中心にして紹介し、多くの場合で平面図に加え見え掛り図を用いて示している。建物の全体的なプロポーションはしばしばいびつになっていて、矩形主体の構成に円形室を武骨に押し込む納まりが随所に見られる。

* 京都大学 研修員・博士(工学)

Research Fellow, Kyoto Univ., Ph. D.

また、建物内部で入口から奥の方向にオーダーが大きくなるという奇妙な透視図法の使い方も散見される⁷⁾。言うまでもないが、そうした奇妙な古代遺跡があったのではなく、モンターノは尤もらしく在りもしない遺跡を描いたのである。実は『古代の神殿』で示されたほとんどの事例は、モンターノの「発明」であることが既に明らかにされている⁸⁾。これまでもモンターノには先人の作品の取り扱いについて杜撰な態度が指摘されてきたし、実作においても独創的な作風が顕著である⁹⁾。古典を保全する意識に乏しく、創作への刺激として捕らえているようである。

このモンターノの姿勢を、マンフレード・タフーリ Manfredo Tafuri は前衛的試みとして積極的に評価した¹⁰⁾。タフーリは、『古代の神殿』の遺跡図は改竄されており、文献学的な信憑性に欠けるとしながらも、古典古代の主題によるヴァリエーションと捉え直し、膠着した建築的統合プログラムを解体する動向として注目したのである。

タフーリはモンターノの「発明」について二つの特徴を指摘した。一つは、平面から想定される空間が、立面および装飾の構成と食い違うこと。もう一つは、矩形や円形といった幾何学的原則の違いにこだわらず異質の空間を取り合わせることである。いずれにせよ、古典的な類型で培われた形態的な統合ないし均整の原則を解体することである。このようにモンターノの「発明」は、透視図法に代表される15世紀以来の空間統合プログラムへの異議申し立てであり、16世紀後期の建築動向を代表する活動と位置付けられた。

図1 ロムルス神殿 (写真: Fiore)

図2 ロムルス神殿付近見取り図 (Fioreの図に筆者加筆)

一方、モンターノが描いた古典的な建築については、17世紀の作品に与えた影響に着目する研究もある。ローマのフォロ・ロマーノにあるロムルス神殿(図1)の調査報告にあたって、フィオーレは、この建築がモンターノを介して17世紀には一つのモデルとなっていたと考え、フランチェスコ・ボッロミーニ Francesco Borromini (1599-1667) やジャン・ロレンツォ・ベルニーニ Gian Lorenzo Bernini (1598-1680) といった代表的建築家の集中形式教会堂との関係を指摘した¹¹⁾。

ロムルス神殿は、クーポラを載せた円形室を中心とし、両翼部に渡る凹面湾曲のファサードをもつ古代遺跡で、マクセンティウスのバシリカ Basilica di Massenzio の傍らにヴィア・サクラ Via Sacra の通りに面して建っている(図2)。ロムルス神殿は紀元1世紀の建設以後、改修を重ねられて現在に至る。調査報告によれば、コンスタンティヌス帝期(306-337)¹²⁾に、元はコの字型であったファサードが翼部前面と中央の円形室入口を緩やかに繋ぐ曲面の装いに改修された¹³⁾。この凹面湾曲のファサードがロムルス神殿の特徴として記憶され、時代を超えてスケッチされてきた¹⁴⁾。

6世紀前期にロムルス神殿は、サンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂 Ss. Cosma e Damiano をつくるにあたって、背後のフォロ・デッラ・パーチェ図書館 Biblioteca del Foro della Pace の一部と合わせて、教会堂として用いられることとなった。神殿であった玄関部の正面扉と円形室の中心を結ぶ線は、図書館に属していた背後の本体部広間の中心線と方向が違っている¹⁵⁾。もともと別個の建築を構成していた要素を取り合わせて新たに教会堂に仕立てた経緯が、建築計画上の問題として現れている。

このように、サンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂の構成は、設計モデルとしては難があるのだが、フィオーレはシークエンスの概念をもって再評価を試みた¹⁶⁾。ヴィア・サクラからのアプローチより、ファサード-円形室玄関-アプスをもつ本体部広間へと続くそれぞれの空間が凹曲面をもっていることに着目し、建築として一定の構造をもつと判断したのである。この考え方は、伝統的な形態的統合ないし均整とは異なる評価基準を試みていて興味深い。

ミラノには『古代の神殿』のためにモンターノが描いたロムルス神殿のドローイング(図3/左半分)があるのだが、平面図の上では、ファサードおよび円形室玄関の軸線と、背後の本体部広間の中心線が一致しているほか、玄関部両脇にある部屋の奥行が円形室直径と同程度に縮まって並んでいること、さらに、湾曲ファサードが両側室前面を半ば覆うまでに広がり、ファサード裏に短い回廊を設け側室への通路としている点が、遺跡の状態と異なる。こうした改竄は、最終的には全く平面構成の違う「発明」へとモンターノを導いたのだが、そこでも凹曲面のシークエンスが読み取れる。

ロムルス神殿については、バルダッサレ・ペルッツィ Baldassarre Peruzzi (1481-1536)、ピッロ・リゴリオ Pirro Ligorio (1510-83) をはじめとする多くの建築家が、調査・研究を行ってドローイング(図4)を残した¹⁷⁾。複雑な平面構成と共に、特徴的な湾曲ファサードを記録したものが多い。フィオーレは、このロムルス神殿のファサードに、クーポラによる空間造形的な中心強化の主題を見出して、ペルッツィのあるスケッチ(図5)と結びつけている¹⁸⁾。そのスケッチは、円形平面の小神殿とそれを取り囲む半円弧状のロジgiaを描いた図である。どちらも総二階建てであり、二つの建物は一体的に構成されている。ロジgiaは複合的建築の翼部と受

け取れる。

フィオーレの研究では、シークエンスがロムルス神殿モデルの主要構造とされ、ファサード意匠については中心強化の指摘に止まる。しかし、ファサードが建築設計において注目を集めていた時代には、平面構成だけが支配的であったとは考え難い。

まず、フィオーレが、ロムルス神殿の影響を指摘した、ローマのサンタニェーゼ教会堂 S. Agnese in Agone (U in Piazza Navona) とサンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂 S. Andrea al Quirinale¹⁹⁾におけるシークエンス構造について分析を行う。

3 サンタニェーゼ教会堂

フランチェスコ・ボッロミーニは、ローマのサンタニェーゼ教会堂の計画に参画し設計を行ったが、その初期案のファサードは、教皇インノケンティウス十世 Innocentius X (在位1644-55) が1654年に計画していたメダル²⁰⁾の図案(図6)に見ることが出来る。この透視図法を加味して描かれたファサード案は、入口を囲う円柱のエディコラを中心にして左右に翼部が広がる下層部と、背後に見えるクーポラの立ち上がりで構成される。下層翼部の端には二本一対の柱が置かれている。下層オーダーのコーニスが曲がって描かれているので、壁が凹面に湾曲しているのが知れる。

ボッロミーニのファサード案は、モンターノの描くロムルス神殿に、湾曲する下層オーダーの構成、および、背後に立ち上がる主要部のシルエットあるいは量感の点で符合している。また、『古代の神殿』に収められた別の「発明」によるモンターノの影響も指摘されている²¹⁾。

一方、平面構成では大きな相違が見られる。ボッロミーニのサンタニェーゼ教会堂案では、円形室玄関に続いてあるべきバシリカ部が省略されており、クーポラ下の集中形式の中心室を数えても、凹曲面の空間は2箇所しかない。シークエンスこそ放棄されないも

の、ボッロミーニは、ロムルス神殿モデルに自由な解釈を試み、殊に平面構成においては固定的モデルとみなさなかったと考えられる。

4 サンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニの設計によるローマのサンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂は、奥行方向に短軸をとる楕円形室を中心にした集中形式である。サンタンドレア教会堂のファサードは、三角ペディメントを載せたエディコラの中央入口部から、湾曲する翼部が左右に広がり、それぞれの端には出入口が正面を向く。背後には本体部の大きなヴォリュームが控える。このファサード構成は、モンターノが示すロムルス神殿の図と同様である。ロムルス神殿遺跡を描いた17世紀のスケッチ²²⁾と比べると、教皇ウルバヌス八世 Urbanus VIII (在位1623-44) による改修後の姿とも共通点の多いことが分かる²³⁾。ただ、サンタンドレア教会堂ファサードの設計時期については、本体部を終えた後、1669年頃に、当初想定していなかった姿に再構成されたと思われる²⁴⁾。

サンタンドレア教会堂は、サンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂のバシリカ部に相当する要素を欠いており、本来玄関部となるべき円形室を楕円形に変形しながら大きく広げて広間としている。サンタンドレア教会堂の玄関部は主室広間に連続する扇形の小部分であり、正面入口の外にはポーチが円く突き出している。凹曲面のシークエンスは否定されないが、サンタンドレア教会堂は、サンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂の構成を忠実になぞったものではない。変形を厭わず自由な再解釈を許している。

以上のように、17世紀の代表的建築家ボッロミーニとベルニーニの教会堂で、凹曲面のシークエンスが確認された。続いて、サンタンドレア教会堂と関係の深い18世紀の事例を分析に加え、ロムルス神殿モデルの有効性を確認する。

図3 モンターノのロムルス神殿図 Milano, Civico Gabinetto dei Disegni nel Castello Sforzesco, coll. Martinelli, racc. Bertarelli.

図4 リゴリオのロムルス神殿図 Città del Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, Cad. Vat. Lat. 3439, f. 42.

図5 ペルッツィのスケッチ Firenze, Uffizi, U146A.

図6 ボッロミーニのサンタニェーゼ教会堂案 Wien, Graphische Sammlung Albertina, Az. Rom 51.

5 サントゥベルト教会堂

トリノ近郊、ヴェナリア・レアーレの城 Castello, Venaria Reale 内にあるサントゥベルト教会堂 S. Uberto は、18世紀前期に活躍したフィリッポ・ユヴァッラの設計によるギリシア十字形式の教会堂である。ユヴァッラは、実施を前提にしたものばかりでなく、カプリッチョ capriccio と呼ばれる空想的ないし奇想的建築図や、サントニューゼ教会堂を含め、様々な時代の建築を訪れた際のスケッチないしドローイングを多く残している²⁵⁾。中でも、サンタンドレア・アル・クィリナーレ教会堂を題材にしたドローイング(図7, 8)が、サントゥベルト教会堂のファサード検討案(図9)と似通っていることから、二つの教会堂間の影響関係が注目されてきた²⁶⁾。

ユヴァッラによるサンタンドレア教会堂ファサード派生案のドローイング(図7)では、中央入口を含むエディコラ部の壁体が曲

図7 ユヴァッラによるサンタンドレア教会堂派生案
Torino, già collezione Tournon, T 098.

図8 サンタンドレア教会堂ファサード案比較図
Torino, già collezione Tournon, T 099, 100.

げられており、ベルニーニの設計をボッロミーニの手法で翻訳したもののみならず解釈がある²⁷⁾。構成は、エディコラを中心に、低層部のオーダーが両翼部まで広がって楕円状に前面広場を取り囲み、端部に弓形ペディメントの出入口を置く。ファサードの後ろには、現状のサンタンドレア教会堂と同様の本体部の渦巻パトレスやランタンが薄く描かれている。ベルニーニの設計では円柱が壁から引き離され前面に突き出していたポーチを、ユヴァッラは壁面を曲げて本体に取り込み、低層部のオーダーで入口扉を縁取る案を提示した。統一された翼部と入口部のエンタブラチャーの高さは、背後の本体部礼拝堂室のものにほぼ重なっている。ファサード中央部エディコラのジャイアント・オーダーは、翼部からずっと高くなり、本体部楕円形主室の軒と同じ高さである。ファサード意匠は、中央部および翼部の水平線が整理されて一つに纏まり、さらに本体部とも整合された。

同じアルバムに綴られた別の一葉(図8)には、ユヴァッラのファサード案とサンタンドレア教会堂のスケッチが対照的に上下に並べられ、改めて意匠構成の整理および相違点の確認が行われている。このユヴァッラの案は、翼部の高さやペディメント上の彫像で先に挙げたもの(図7)と若干の違いが見受けられるが、ほぼ同じ意匠といつてよい。つまり、ユヴァッラがサンタンドレア教会堂を主題としたファサード派生案を構想していたことが明らかである。また、サンタンドレア教会堂については、寸法を書き込んだ平面図やポーチの見え掛り、断面のドローイングが別に見つかっている²⁸⁾ことから、ユヴァッラが深い関心を寄せていたことが知れる。

ユヴァッラの派生案は、原典の自由な解釈を創作の動機としている点で、モンターノの「発明」と同様である²⁹⁾。しかし、隣り合う部分同士でも整合が取れていなかった意匠構成を、建築全体で整理する傾向には注意を要する。

ユヴァッラの教会堂には集中形式が多い³⁰⁾。サントゥベルト教会堂の計画も当初から集中形式が主題であった。当初設計案は、真直ぐなロジリアのファサードをもち、二つの鐘楼を備えた交差ヴォールトのギリシア十字形式となっていた³¹⁾が、その後の第二期案ではクーポラが立ち上がる湾曲ファサードの設計に変更された。この第二期案がベルニーニのサンタンドレア・アル・クィリナーレ教会堂との関係が指摘されるものである。その指摘は、第二期案ファサード検討図(図9)とサンタンドレア教会堂派生案とが基本的な構成で符合することに基づいている。中央部エディコラではジャイアント・オーダーの円柱で三角ペディメントを支え、楕円形窓の下で入口を縁取るオーダーが翼部の湾曲面に繋がる。中央部の壁体は、真中が膨らむ反転曲面となっているが、これはユヴァッラによるサンタンドレア教会堂派生案の下層部のポーチを含めた動きと相似であり、ペディメントにのる彫像や十字架の姿も一致する。また、モンターノによるロムルス神殿ファサードとも多くの点で一致する³²⁾。

ただ、空間的な繋がりについては、凹曲面の存在が弱くシーケンスが感じにくくなっている。教会堂交差部の広間が方形平面で、クーポラを支えるペンデンティヴの曲面に横方向の連続性が乏しく、ファサードでは翼部が強い曲がり度で巻き込むので中央エディコラの脇で壁体が折れ曲がるからである。エディコラが全体的に凸面を形作ることもロムルス神殿と違っている³³⁾。

第二期案で入口付近の壁が曲がる理由は、玄関として円形の空間

を挿入する意図にあったことが、一枚の平面詳細図(図10)から読み取れる。その図面では異なる二つの案が比較検討されている。左側が平たい壁の外に円いポーチを突き出すサントンドレア教会堂と同様の手法を示すのに対し、右側ではファサードとなる外壁を曲げることを提案している。この右側の案が先のファサード図(図9)に符合する。平面図を見ると、玄関室内上部にバルコニーが設けられているが、教会堂交差部へ向けて中央を円く突き出した形をしている。よって玄関室は、ファサード側および交差部側共に円く膨らんでいるのだが、バルコニー下の天井意匠から、双方の曲線が同心円弧を基準にしていることが分かる。

サントゥベルト教会堂第二期案において、ギリシア十字のファサード側の腕にあたる玄関部が円形室に準じるとみなすと、サンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂のファサード、円形玄関室、アプスをもつ本体部広間それぞれに対応する要素を見つけることが出来る。つまり、平面図の上でロムルス神殿モデルの円形室にあたるのは、十字形式の腕部であって交差部ではない。しかし、ファサードの構成においては、交差部のクーポラが十字形式ないし集中形式を象徴し、高い位置で量感を示す。交差部の姿は、ロムルス神殿の円形室の役割を担っているのである。このようにサントゥベルト教会堂は、十字形式の腕部とロムルス神殿モデルの円形室を重ねることによって、複合的で多義的な構成になっている。

6 ファサードと広場

フィオーレが指摘するファサードにおける中心強化を究明するためには、建物の平面、立面以外に、広場の空間についても検討し、設計に関するファサード意匠の主導性を調べる必要がある。

サンタニェーゼ、サントンドレア、サントゥベルトの各教会堂は、湾曲ファサードによって積極的に前面広場と関係を結んでいる。また、教会堂前広場は、一定の空間領域をもつと考えられる。ファサードの凹曲面は閉じてはいないが、湾曲面を延長補完した囲いを想像することは容易いからである。サンタニェーゼ教会堂案(図6)でも前面の神殿風基壇は楕円形である。建物の内外で円く形作られた空間が連なる。つまり、湾曲ファサードに囲まれた教会堂前広場は、建築プログラムに組み込まれ、内部の空間構成に連続している。

教会堂前広場は、円形室ないしクーポラの外観と関係している。ロムルス神殿モデルでは、中央後方に置かれた円形室の外観がファサードの中心的な役割を担っている。サンタニェーゼ教会堂ではクーポラが高く聳え、サントンドレア教会堂ではエディコラの両脇から円筒部が覗きランタンが立ち上がる。サントゥベルト教会堂では、円筒部はエディコラより上にあり、クーポラはかなり高位置になる設計であった³⁴⁾。他の例では、ヴァチカンのサンピエトロ教会堂の計画において、アントニオ・ダ・サンガッロ(甥) Antonio da Sangallo il Giovane (1485-1546) の設計以降、クーポラの外観が計画の重要点であったと考えられている³⁵⁾し、ボッロミーニが設計したローマのサンティエーヴォ・アッラ・サピエンツァ教会堂 S. Ivo alla Sapienza, Roma では、クーポラ外側に内部の形状とは関係のない螺旋状の装飾が見られる。これらのことから、17-18世紀の集中形式では外観への注意が高まっており、中でもクーポラが重要な役割を担っていたと考えられる。

建て込んだ都市の中でクーポラを見せるには、前面に広場を確保すると共に、クーポラの位置をファサードに近づけることが必要で

ある。そのため、バシリカ部のあるラテン十字平面よりも集中形式ないしギリシア十字形式が有利となる。このように、広場からの外観を積極的に設計に取り込む上では、集中形式と湾曲ファサードの組み合わせは妥当なものとなっている。中央部の凸面の湾曲は、クーポラがファサード前面より離れる時や、広場に充分な奥行のない時に副次的に用いられる方法と推察される。

7 18世紀の教会堂ファサード

ここで18世紀における集中形式の展開について概観し、考察を加えておきたい。

教会堂ファサードの中央部を膨らませる手法は、18世紀に広く見られる³⁶⁾。バシリカ形式にも用いられた³⁷⁾が、集中形式では、カルロ・フォンターナ Carlo Fontana (1638-1714) がスペインのロヨラの神学校に設計した聖イグナチオ教会堂 S. Ignazio, Loyola (献堂1732年)の事例がある³⁸⁾。この教会堂は、大規模な神学校の一部として、ファサードに前面部を円く突き出す形で組み込まれている。

一方、建築家を養成する美術学校では、18世紀に架空の建築を設計するアイデア設計競技が催されたが、集中形式の教会堂を組み入れた大規模建築が課題にされることがしばしばであった³⁹⁾。また、

図9 サントゥベルト教会堂ファサード案
Torino, Biblioteca Nazionale, Ris. 59/3 c. 26.

図10 サントゥベルト教会堂玄関部平面詳細
Torino, Archivio di Stato, Corte, Palazzi Reali,
Mazzo 3, Venaria Reale, fasc. I, 1719.

ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ Giovanni Battista Piranesi (1720-78) が1750年に発表した仮想の神学校案⁴⁰⁾も凹面湾曲のファサードをもつ集中形式の全体構成であり、一面に集中形式の教会堂を備えている。いずれの場合でも、教会堂を中心とした軸線上に円形室が列なり、室数の非常に多い大規模施設が提案された。こうした複雑な平面構成は、ロムルス神殿モデルだけでは説明できないが、モンターノの「発明」にあった建築的な統合あるいは均整に関する不具合は見当たらなくなっている。

8 結

以上のように、17-18世紀の集中形式教会堂において、ロムルス神殿を取り込んだサンティ・コズマ・エ・ダミアノ教会堂と同様の、曲面のシークエンスに基づいたモデルを認めることは可能である。しかし、凹面湾曲の要素が少ない場合や、逆に全体構成が複合的で他の構成に優先するかどうか判断できないことがあり、一般的なモデルとして成立していたとは認め難い。ただし、17世紀当時の建築家の古典主義的傾向⁴¹⁾を考えれば、ロムルス神殿は、集中形式の教会堂が湾曲ファサードとの関係を深める契機を与えたと思われる。つまり、前面広場を抱え込む凹面湾曲のファサードと背後に立ち上がるクーポラを中心とする集中形式の組み合わせが、教会堂設計の一つの動機となっていたと考えられる。

17世紀初頭においてモンターノは、矩形と曲線・曲面を自由に組み合わせる建築造形を模索していたと考えられる。これは、16世紀の建築家に刺激を受けたためであろう⁴²⁾。一方、18世紀のユヴァッラの作品に見られるのは、構成区分を侵すことなく、むしろ要素単位を尊重して全体の意匠構成を整理・調整するやり方である。その後、集中形式や湾曲ファサードは、定着した図式に囚われずに、部分的な誇張、編集あるいはパラフレーズによる複合化へと展開して行く。こうして、17および18世紀においても集中形式は教会堂設計の重要な主題であったが、もはや古典主義の領域を超えた複合的構成の一要素として捉えなおされていたことが明らかとなった。

註

- 1) 集中形式については、Richard Krautheimer, « Introduction to an "iconography of mediaeval architecture" », Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, vol. 5 (1942), pp. 1-33 でその形式概念が提起されて以来、バシリカ形式(長堂形式)とともに教会堂建築における二大類型として議論されてきた。
- 2) 参照: Arnaldo Bruschi, S. Pietro: Spazi, strutture, ordini. Da Bramante ad Antonio Da Sangallo il Giovane a Michelangelo, in (a cura di) Gianfranco Spagnesi, « L'architettura della basilica di San Pietro. Storia e costruzione », Atti del Convegno Internazionale di Studi (Roma, Castel S. Angelo, 7-10 novembre 1995), Volume in memoria di Giuseppe Zander (1920-1990) (« Quaderni dell'Istituto di storia dell'architettura », n.s., fasc. 25-30 (1995-97)), Roma 1997 pp. 177-194.
- 3) 参照: Giulio Carlo Argan, La « retorica » e l'arte barocca, in « Retorica e Barocco », Atti del III Congresso Internazionale di Studi Umanistici, Roma 1955, pp. 9-14 (ora in Giulio Carlo Argan, « Studi e note. Dal Bramante al Canova », Roma 1970, pp. 167-176); Giulio Carlo Argan, Retorica e architettura, in « Stil und Überlieferung in der Kunst des Abendlandes », Akten des 21. Internationalen Kongresses für Kunstgeschichte (Bonn 1964), Berlin 1967 (ora in G. C. Argan, « Studi e note », op.cit., pp. 177-184); 小林衛「マデルノのファサードにおける壁の扱いについて」日本建築学会計画系論文集 No.550 (2001.12), pp.281-286; 小林衛「17世紀イタリアの教会堂ファサードにおける造形手法の展開」九州大学大学院博士論文 2002.
- 4) Francesco Paolo Fiore, L'impianto architettonico antico, « Quaderni dell'Istituto di storia dell'Architettura », XXVI (1980), fasc. 157-162, Il « Tempio di Romolo » al Foro Romano, pp. 63-90. その後、フィオーレは同じ主題を再度採り挙げた。Francesco Paolo Fiore, Fortuna di un modello architettonico tardoantico: la chiesa dei Santi Cosma e Damiano nel Foro Romano, in (a cura di) Maurizio Caperna, Gianfranco Spagnesi, « Architettura. Processualità e trasformazione »,

- Quaderni dell'Istituto di Storia dell'Architettura, n.s., fasc. 34-39 (1999-2002), Atti del Convegno Internazionale di Studi (Roma, Castel Sant'Angelo, 24-27 novembre 1999), Roma 2002, pp. 145-154.
- 5) Giovanni Battista Montano, « Scelta d[i] varii tempietti antichi con le piante et alzate, disegnati in prospettiva ... Gio. Batta. Montano milanese; date in luce, per Gio. Batta. Soria... », Roma 1624
 - 6) Manfredo Tafuri, « L'architettura del Manierismo nel Cinquecento europeo », Roma 1966, pp. 245-254. また、初期のビエトロ・ダ・コルトーナへの影響は、繰り返し指摘されている。モンターノは、ピッロ・リゴリオとジュリアーノ・ダ・サンガッロによる古代建築の図案を写した手稿を残した。「バルバリニアノ」手稿 Codice barbariniano」と呼ばれ、現在、ロンドンのソーネ美術館 London, Sir John Soane's Museum に収蔵されるものである。ビエトロ・ダ・コルトーナは、このバルバリニアノ手稿を研究する機会があったと推察される。参照: Chiara Baglione, Pietro da Cortona, in (a cura di) Aurora Scotti Tosini, « Storia dell'architettura italiana. Il Seicento », Milano 2003, p. 190.
 - 7) 参照: Daniela del Pesco, « L'architettura nel Seicento », Storia dell'Arte in Italia, Torino 1998, pp. 21-22.
 - 8) Giuseppe Zander, Le invenzioni architettoniche di Giovanni Battista Montano milanese (1534-1621), « Quaderni dell'Istituto di Storia dell'Architettura », 30 (1958), pp. 1-21; 49-50 (1962), pp. 1-32.
 - 9) モンターノは、ヴィニョーラの『五つのオーダー-Li Cinque ordini di Architettura』の付録としてミケランジェロ・ブオナローティの門 Le Porte d'Architettura di Michel Angelo Buonarroti」を 1610 年に出版しているが、示されたピウス四世期 (1559-65) の 6 つの門のうち、一つの門だけがミケランジェロのものであった。また、モンターノの実作は、唯一ローマのサン・ジュゼッペ・ディ・ファレニャーミ教会堂 S. Giuseppe dei Falegnami, Roma のファサード (1602 年設計) が知られるのみ。ペディメントが 3 つあるファサードである。なお、モンターノは読み書きができなかったと言われている。
 - 10) M. Tafuri, « L'architettura del Manierismo nel Cinquecento europeo », op.cit., IV. Fra lo sperimentalismo e l'utopia: dai riformatori sociali alle « invenzioni » del Montano, pp. 217-254.
 - 11) F. P. Fiore, L'impianto architettonico antico, op.cit., pp. 63-90; F. P. Fiore, Fortuna di un modello architettonico tardoantico, op.cit., pp. 145-154.
 - 12) 306-324 年は共同統治。
 - 13) マクセンティウス帝期 (306-312) ではコの字型に窪んでいたと考えられる。円形室前面には入口扉の位置に平らな壁が設けられていたことが調査で明らかになった。この円形室前面の壁は、円形室円筒部や両脇の部屋と一体的に施工されているが、ファサードの湾曲した壁は別の時期のものでされた。参照: F. P. Fiore, L'impianto architettonico antico, op.cit., pp. 63-90.
 - 14) 参照: Loretta Lupi, Barbara Pettinau, Disegni e stampe, « Quaderni dell'Istituto di Storia dell'Architettura », XXVI, 1980, fasc. 157-162, Il « Tempio di Romolo » al Foro Romano, pp. 35-62.
 - 15) 玄関部と広間の中心線は 22°30' の角度をなす。他方、両脇の側室への出入口を結ぶ線とも直交しない。両側室の出入口を結ぶ線は玄関部中心線に直交する線と 4° の角度をなす。
 - 16) F. P. Fiore, Fortuna di un modello architettonico tardoantico, op.cit., p. 150.
 - 17) Francesco di Giorgio Martini, Firenze, Uffizi, Arch. 330v; Andrea Coner, London, Sir John Soane's Museum, notebook attributed to Andrea Coner, f. 23; Baldassarre Peruzzi, Firenze, Uffizi, Arch. 543; Pirro Ligorio, Roma, Biblioteca Vaticana, Cod. Vat. Lat. 3439, ff.30, 40, 42; Domenico Castelli, Roma, Biblioteca Vaticana, Cod. Barb. Lat. 4409, ff. 65-67 他。参照: L. Lupi, B. Pettinau, Disegni e stampe, op.cit., pp. 35-62.
 - 18) F. P. Fiore, L'impianto architettonico antico, op.cit., p. 85; F. P. Fiore, Fortuna di un modello architettonico tardoantico, op.cit., pp. 148-149.
 - 19) F. P. Fiore, L'impianto architettonico antico, op.cit., p. 85; F. P. Fiore, Fortuna di un modello architettonico tardoantico, op.cit., pp. 152-153.
 - 20) インノケンティウス十世は、毎年聖ペテロの祝祭の時に、自身の宮廷に仕える者や外交官、友人に金ないし銀でつくったメダルを配るのを恒例にしていた。
 - 21) Martin Raspe, Borromini und Sant'Agnese in Piazza Navona, « Römisches Jahrbuch der Bibliotheca Herziana », 31 (1996), pp. 313-365; Martin Raspe, Sant'Agnese in piazza Navona, in (a cura di) Richard Bösel, Christoph Luitpold Frommel, « Borromini e l'universo barocco » (2 voll.), catalogo della mostra (Roma, Palazzo delle Esposizioni, 16 dicembre 1999-28 febbraio 2000), Documenti di architettura, n.127, Milano 2000, II, pp. 184-186, cat. X. 24.
 - 22) 作者不詳 (オランダ人), Tempio di Romolo. London, British Museum, Department of Prints and Drawings, 1871-12-9 6331, 900329. 参照: L. Lupi, B. Pettinau, Disegni e stampe, op.cit., cat. 36, fig. 53.
 - 23) スケッチにみる遺跡は、入口が弓形破風を乗せたエディコラで飾られ、クーポラが後ろに見える。本体部の煉瓦野面仕上げの壁、曲がった翼部、翼部端にある入口上部の弓形の装飾も共通するし、中央入口上には弓形のペディメントがありサンタンドレア教会堂の櫛形窓に符合する。
 - 24) サンタンドレア教会堂の計画において、設計を始めた当初、1658 年の時点では、現状実施案にある湾曲した翼部やボーチの円い突き出しは予定されていなかった。教会堂本体部については当初の設計からの変更はなかったが、ファサードの設計が固まったのは 1669 年頃と見られており、ファサードから櫛円形広間、奥にアプス状の壁をもつ主祭壇までの凹面面のシークエンスが成立したの

- は最終段階であった。なおベルニーニは、1634 年にサンタンドレア教会堂に先立って、プロパガンダ・フィーデ宮内の東方三博士礼拝堂 *Capella dei Re Magi, Palazzo di Propaganda Fide, Roma* で横長の楕円平面を計画していたが、この設計は平たい壁のファサードで考えていた。参照: Tod A. Marder, « *Bernini and the Art of Architecture* », New York-London-Paris 1998, pp. 197-207.
- 25) サンタニューゼ教会堂については、ファサードのスケッチだけでなく、ボッロミーニ案の平面図の模写を描き残している。ユヴァッラがサンタニューゼ教会堂に高い関心を寄せていたことが分かる。Torino, già collezione Tournon, T 034v, 054. なお, collezione Tournon については, Andreina Griseri, « *Libro di più pensieri d'architettura di Filippo Juvarra* », Cinisello Balsamo 1998 を参照。
- 26) 参照: Lorenzo Rovere, Vittorio Viale, Albert Erich Brinckmann, « *Filippo Juvarra* », Milano 1937, pp. 124-125; Richard Pommer, « *Eighteenth-Century Architecture in Piedmont. The Open Structures of Juvarra, Alfieri, and Vittone* », New York-London 1967, p. 30, fig. 42; Henry A. Millon, « *Filippo Juvarra. Drawings from the Roman Period, 1704-1714, Part I* », Corpus juvarrianum, Roma 1984, pp. 243-244, catt. MM 169, 171-172, T 098-100; Gianfranco Gritella, « *Filippo Juvarra. L'architettura* » (2 voll.), 29. *Venaria Reale: la chiesa di Sant'Uberto, 1716-1730*, Modena 1992, I, p. 342, figg. 425-426; A. Griseri, « *Libro di più pensieri d'architettura di Filippo Juvarra* », op.cit., p. 32, catt. XCVIII, XCIX/C; Elisabeth Kieven, « *Il borrominismo nel tardo barocco* », in (a cura di) R. Bösel, Ch. L. Frommel, « *Borromini e l'universo barocco* », op.cit., I, pp. 119-127; Costanza Caraffa, *Gaetano Chiaveri e la ricezione di Borromini nell'ambiente dell'Accademia di San Luca*, in (a cura di) Christoph Luitpold Frommel, Elisabeth Sladek, « *Francesco Borromini* », atti del convegno internazionale (Roma 13-15 gennaio 2000), Milano 2000, p. 444.
- 27) E. Kieven, « *Il borrominismo nel tardo barocco* », op.cit., p. 122.
- 28) New York, Metropolitan Museum of Art, MM 169, 171-172; Torino, Biblioteca Nazionale, Ris. 59.4, 2 v. 7. 参照: H. A. Millon, « *Filippo Juvarra* », op.cit., catt. MM 169, 171-172.
- 29) ユヴァッラにはモンターノの影響が指摘されている。参照: Tito Bianchi, *Un manoscritto poco noto dello Juvarra*, in Atti del X Congresso di Storia dell'Architettura (Torino 1957), Roma 1959, p. 409; Sandro Benedetti, *Guarini ed il Barocco romano*, in « *Guarino Guarini e l'internazionalità del Barocco* », atti del convegno internazionale promosso dall'Accademia delle Scienze di Torino (30 settembre-5 ottobre 1968), Torino 1970, p. 710; Andreina Griseri, « *Il Classicismo juvarriano* », in « *Bernardo Antonio Vittone e la disputa fra Classicismo e Barocco nel Settecento* » (2 voll.), atti del convegno promosso dall'Accademia delle Scienze di Torino nella ricorrenza del secondo centenario della morte di Bernardo Vittone (21-24 settembre 1970), Torino 1972, I, p. 155.
- 30) サントゥベルト教会堂 (1716-30) の他にスーペルガのバシリカ *Basilica di Superga* (1715-), アルカンジェロ・ラッファエーレ *Arcangelo Raffaele* に献呈した設計案 (1718)、トリノのサンタ・クローチェ教会堂 *S. Croce, Torino* (1718)、トリノのドゥオーモ新築計画 *Duomo Nuovo, Torino* (1728)、キエリのサンタンドレア教会堂計画 *S. Andrea, Chieri* (1728-33)、カルチナーテのサンタ・マリア・アッスンタ教会堂計画 *S. Maria Assunta, Calcinatè* (1729) でも採用した。さらには、特定されていない教会堂の一連の設計案も知られている。(Torino, Museo Civico, vol. I, c. 81 n. 122 1824/DS, c. 88 n. 137 1839/DS, c. 100 n. 161 1863/DS, c. 99 n. 159 1861/DS.) また、ローマのサン・ルーカ美術学校 *Accademia di San Luca, Roma* で催された設計競技の構想案 (1706)、同美術学校へ贈った教会堂設計案 (1707) も集中形式の設計であったし、ユヴァッラの数多くのカプリッチョにも見られる。参照: G. Gritella, « *Filippo Juvarra* », op.cit.
- 31) 参照: R. Pommer, « *Eighteenth-Century Architecture in Piedmont* », op.cit., appendix III, catt. 1-4; G. Gritella, « *Filippo Juvarra* », op.cit., pp. 328-353.
- 32) 次の点で一致する。低層に湾曲翼部をもち、中央に円柱のエディコラが三角ペディメントを頂く。後ろには大きなヴォリュームの本体部クローボラがファサードの肩越しに見える。また、モンターノのロムルス神殿の図(図3)は左半分だけが示されていたが、これに対応させて右側に描かれた墓と思しい立面図の意匠構成が、ユヴァッラのサンタンドレア教会堂ファサード派生案およびサントゥベルト教会堂ファサード第二期案に符合することにも注目したい。アーチ型をした中央開口部の迫元から翼部へコーニスが連続する。この下層のオーダーに、二本一對の円柱によるジャイアント・オーダーのエディコラを重ねている。
- 33) このファサード中央の膨らみは、後の案(Torino, Biblioteca Nazionale, Ris. 59/3, c. 19.)では消えている。参照: R. Pommer, « *Eighteenth-Century Architecture in Piedmont* », op.cit., appendix III, cat. 11; G. Gritella, « *Filippo Juvarra* », op.cit., pp. 328-353.
- 34) 註 33 参照。
- 35) 参照: Sandro Benedetti, *L'Officina architettonica di Antonio da Sangallo il Giovane: La cupola per il S. Pietro di Roma*, in (a cura di) Corrado Bozzoni, Giovanni Carbonara, Gabriella Villetti, « *Saggi in onore di Renato Bonelli* » (2 voll.), Quaderni dell'Istituto di Storia dell'Architettura, n.s., fasc. 15-20 (1990-92), Roma 1992, I, pp. 485-504.
- 36) 教会堂ファサードにおける中央部の膨らみは、17世紀末から18世紀前期にかけて数多く見られる。参照: Hellmut Hager, *Il modello di Ludovico Rusconi Sassi del concorso per la facciata di S. Giovanni in Laterano (1732) ed i prospetti a convessità centrale durante la prima metà del Settecento in Roma*, « *Commentari* », XXII (1971), I, pp. 35-67.
- 37) ボッロミーニによるローマのサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ教会堂 *S. Paolo fuori le Mura, Roma* 計画案や、ローマのサンタ・クローチェ・イン・ジェルサレム教会堂 *S. Croce in Gerusalemme, Roma* の改築が例として挙げられる。サンタ・クローチェ教会堂の設計は1743年、ドメニコ・グレゴリーニ *Domenico Gregorini* (1700-77)、および、ピエトロ・パッサラクワ *Pietro Passalacqua* (1690-1748) による。グレゴリーニは、ユヴァッラの弟子。パッサラクワは、ユヴァッラの甥であり弟子で、若年期にはグレゴリーニの下で働いた。因みにパッサラクワは、1713年にサン・ルーカ美術学校で行われた設計競技 *Concorso Clementino* (主題: ポーチのある円形神殿 *Tempio rotondo con portico*) において、第一級の部で二等賞をとっている。その設計は、大きな楕円形のロジgiaを置いてファサード中央を膨らませており、サンタ・クローチェ教会堂を思わせる。(Roma, Accademia di San Luca, nn. 268-270. 参照: Paolo Marconi, Angela Cipriani, Enrico Valeriani, « *I disegni di architettura dell'Archivio storico dell'Accademia di San Luca* » (2 voll.), Roma 1974)
- 38) 大きなクローボラの集中形式教会堂を矩形の造形の学校部分に埋め込むにあたって、内部の円形室広間と同心円のロジgiaの膨らみを前面に出してファサードの中心とした。神学校建物と一体なのでファサードは左右に大きく広がっている。
- 39) サン・ルーカ美術学校の設計競技では特に集中形式が多い。1732年には、ベルナルド・アントニオ・ヴィットーネ *Bernardo Antonio Vittone* (1704/05-70) が海に囲まれた都市を主題とした第一級の部の一等賞を勝ち取った。(Bernardo Antonio Vittone, *Una città in mezzo al mare, planimetria della piazza principale*, Concorso Clementino, Prima classe di architettura, 1732. Roma, Accademia Nazionale di San Luca, nn. 377-384. 参照: P. Marconi, A. Cipriani, E. Valeriani, « *I disegni di architettura dell'Archivio storico dell'Accademia di San Luca* », op.cit.) その案では、四方からギリシア十字形式の教会堂が円形広場に向かい、いずれの教会堂も円いロジgiaを突き出すファサードをもっている。
- 40) Giovanni Battista Piranesi, *Pianta di ampio magnifico Collegio formata sopra l'idea dell'antiche Palestre de' Greci, e Terme de' Romani...* (Giovanni Battista Piranesi, « *Opere varie di architettura, prospettiva grotteschi, antichità inventate, ed incise da Giambattista Piranesi architetto veneziano* », Roma 1750).
- 41) モンターノやユヴァッラだけでなく、一般的に古典に対する関心を共有していたと考えべきである。ボッロミーニは古代建築に造詣が深く、ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会堂 *S. Giovanni in Laterano, Roma* の修復計画が任された(参照: Augusto Roca De Amicis, Elisabeth Sladek, *San Giovanni in Laterano*, in (a cura di) R. Bösel, Ch. L. Frommel, « *Borromini e l'universo barocco* », op.cit., II, cat. XII, pp. 209-214.)、ピエトロ・ダ・コルトーナは、バレストリーナの古代遺跡の復元図 (London, Victoria and Albert Museum, vol. 92 D46, E306-1937) を残している。
- 42) フランチェスコ・ディ・ジョルジョやジュリアーノおよびアントニオ・ダ・サンガッロ、レオナルド、セルリオ、サルステジオおよびバルダッサレ・ベルツツィ、ミケランジェロの影響が指摘されている。M. Tafuri, « *L'architettura del Manierismo nel Cinquecento europeo* », op.cit., p. 250.

図版出典

- 1, 3, 5) F. P. Fiore, *Fortuna di un modello architettonico tardoantico*, in « *Architettura. Processualità e trasformazione* », Roma 2002, figg. 2, 8, 7.
- 2) F. P. Fiore, *L'impianto architettonico antico*, « *Quaderni dell'Istituto di Storia dell'Architettura* », XXVI (1980), fasc. 157-162, fig. 83 に筆者加筆
- 4) M. Tafuri, « *L'architettura del Manierismo nel Cinquecento europeo* », Roma 1966, fig. 169.
- 6) (a cura di) R. Bösel, Ch. L. Frommel, « *Borromini e l'universo barocco* », Milano 2000, II, cat. X.23.
- 7, 8) A. Griseri, « *Libro di più pensieri d'architettura di Filippo Juvarra* », Cinisello Balsamo 1998, catt. XCVIII, XCIX/C.
- 9, 10) G. Gritella, « *Filippo Juvarra. L'architettura* », Modena 1992, I, figg. 425, 427.

(2004年10月18日原稿受理、2005年1月7日採用決定)